評論　2010年の北海道

1月　冬季オリンピック代表に中学生が選ばれる
高木美帆（スピードスケート・帯広南商高）が示す北海道のスポーツ文化

東原　文郎

1　高木美帆，バンクーバー五輪に出場

バンクーバー五輪第７日目の2010年２月19日，バンクーバー近郊リッチモンドにある五輪オーバルで開催されたスピードスケート女子1000メートルに，日本選手団最年少の15歳，高木美帆選手が出場した。全中（全国中学校体育大会）を制さずに五輪出場を果たした「スーパー中学生」[1)]は2009年12月29，30日に長野で行われた代表選考会で彗星のごとく登場して以来[2)]，ますます加熱する報道の只中にあった。毎日のようにその一挙手一投足が紙面に上り，民間調査会社インテージが実施した「冬季オリンピックに関する調査[3)]」では，今回出場する日本代表選手のうち応援したい選手第４位に挙がった[4)]。

これほどの注目を集めた高木はしかし，１分19秒53で完走者中最下位の35位に終わった。その後の1500メートルでも23位とふるわず，銀メダルを獲得した団体追い抜きに至っては一度もレースに立たなかった。結果的に高木にとって初めてのオリンピックは，ほろ苦いものになった。そして，ほとんどのメディアがそれ以降彼女への言及をやめてしまった。

残念だ。メダルやそれに準ずる活躍を期待された高木の不甲斐ない結果にたいして残念なのではない。高木の全身全霊のチャレンジや，彼女を生んだ生育環境を冷静に評価する声が乏しいことに残念なのである。私たちが高木を応援し，北海道が生んだアスリートとして誇り，ソチでの活躍を願うならなおさら，今回の高木の挑戦から私たちが何を得るかが肝要になろう。その試みは，私たち自身のスポーツ環境やスポーツに対する考え方，スポーツ文化を再考することにつながるのである。

2　高木美帆の性格と生育環境

バンクーバー五輪出場者の中でも高木の注目度が一段と高まった一つの要因は，その特異な生育環境にあった。最年少であったこともさることながら，気負いのない発言と他の選手にないマルチな才能が報道されることで，いっそう衆目を集めることとなった。確認

しよう。

３人兄妹の末っ子として育った高木美帆は，「兄も姉もスケートをしていたので，その流れで」幼稚園からスケートを始めた[5)]。兄大輔（当時日体大１年），姉菜那（当時北海道・帯広南商高２年）もスピードスケートの選手で，美帆も地元クラブで自然とスケート靴を履くようになっていた[6)]。小学校にあがり，兄，姉も出場していたであろう地元十勝のスピードスケート競技会に自然と参加し，当たり前のように優勝をさらってきた[7)]。

一見するとスケート英才教育に見えるが，違う。全国的にはあまり知られていないことであるが，高木美帆は同時に十勝周辺のロードレース大会等にも毎年出場しており，北海道新聞には2001年，すなわち小学１年生のころから，その成績優秀者として氏名が紹介されている[8)]。中学校でも男子に混じってサッカー部に所属し，Ｕ１５日本代表合宿にも招集された経験を持つエースであった。ゆくは「なでしこジャパン」としての活躍も期待されるほどの器であったことになる。これに加え，ヒップホップダンスを文化祭で披露したり，学業も学年でトップクラスをキープしたという[9)]。

こうした高木の多才が示すのは，その能力が，極めて偶発的に形成されたものであることだろう。すなわち，英才教育によりエリート・アスリートになるべくしてなったというよりは，さまざまな能力に恵まれた十勝の怪童が，たまたま触れる機会が多かったスピードスケートにのめり込んでいった結果，最年少五輪代表高木美帆が生まれたものと解釈できる。また，父親の言葉を借りれば，３人兄妹の中でもっとも負けず嫌いであるという性格が，様々な対象へのチャレンジを促し，そのポテンシャルを十全に発達させることを助けたものと推察される。

３　高木を育てた文化をどう評価するか？

それでは，私たちはこの高木の多才を支えた文化をどう評価すべきなのか。育成に関わったコーチ陣は，さまざまな競技に関わらせることで得られるメリットについて以下のように評している。

「スケートの指導をする全十勝中体連スピードスケートクラブの桜井知克士（ちかし）コーチは「いろんな競技をさせるのは私たちの考え」と語る。二足どころか何足もの「わらじ」を履き，中学生までは自分の好きなことをやらせる。おおらかな雰囲気の中で「スケートだけでは培えない股関節やお尻周辺の筋肉が発達し，特にカーブで体重を効率よく足に伝える滑りが可能となった」と日本スケート連盟の白幡圭史ジュニアコーチは分析する。」[10)]

ここで，多種目に通じることが専門種目のパフォーマンス向上に貢献するかについて，議論したいわけではない。もし本当に，様々な競技に取り組むことで実質的なパフォーマ

ンス向上の効果が得られるのであれば，より多くのスポーツ選手・指導者がこれを取り入れるであろう。しかし，単に筋力トレーニングで解決できることならばわざわざ他競技に取り組む必要もない。この記述を単純なトレーニング効果の話に落とし込むと，高木の育成環境から私たちが学ぶべき多くを失ってしまう。

そうではなく，ここでは「中学生までは自分の好きなことをやらせる」「おおらかな雰囲気」という記述にこそ注目したい。日本のユース・スポーツと言えば，従来一つの種目に取り組み，他の活動への注力をむしろ制限するように形成されてきた。一意専心，一心不乱。自分が全てを注ぎ込んでいる活動が，本当に好きなことかどうかわからなくなってしまうことすらある。そうした対象に，まさに取り憑かれたように取り組むことが，スポーツを志す者の美徳とさえされてきたように思う。

しかし高木は違った。好きなこと，興味があること，しなければならないこと（勉強！）にとことん取り組み，結果として一つの種目（スピードスケート）で五輪代表に，もう一つの種目（サッカー）で世代別日本代表候補に選ばれるまでになった。筆者には，それ自体が素晴らしいことであり，北海道の誇るべき文化の賜物であると感じる。ここにこそ私たちが学び，次世代の育成に利用すべき知が示されていよう。

高木は，上述したような一意専心型スポーツ文化の周縁にあり，その影響力の外でさまざまな活動に触れ，伸び伸びと自らの才能を開花させてきた。そして五輪に際しても，向上心を絶やすことなく，果敢にチャレンジした。筆者の目には，完璧な演技を見せたキム・ヨナに敗れ，銀メダル（世界で２位！）にも関わらず悔し涙を流した浅田真央選手よりも，出場できなかった団体追い抜き後に「まだメダリストにならなくてよかった」[11]と述べた高木美帆の方がはるかに誇らしく思われた。北海道ではこんなに素晴らしい子が育つのか，北海道にはこんな子を育てるような豊かなスポーツ文化があるのかと，多くの人々が認識したであろう。それ自体が高木の功績であったと，声を大にして言いたい。

考えてみれば北海道は，夏でも冷涼で激しいスポーツには好適だし，当然冬はウィンタースポーツにすぐにアクセスできる，日本でも希有な条件を有した土地である。それと表裏だが，夏季種目も冬季種目も通年で活動するには厳しい環境にあるとも言える。その意味で，一意専心型スポーツ文化にはもともと馴染まず，高木が体現したような多種目季別型スポーツ文化を醸成する素地がすでにあったと言えよう。高木は，北海道でのみ可能となるような，したがって他の地域に住む人々が羨むような環境と文化の中で育ったのだ。北海道の人々は，これを誇らずに何を誇ろう。

冒頭に述べたが，こうした文化に対する評価が，メディア上で十分になされていないことが残念だ。高木が高校進学後，サッカーを辞めてスケートに専心すると決心したことは

各紙で報じられても，サッカーも続けるべきと評したのは全国５紙のうちたった１紙であった[12]。北海道新聞ですら，「明治北海道十勝オーバル」の存在が，通年での強化を促進するとの見解を述べるだけで[13]，サッカーの継続についてはふれられていない。通年型室内リンクの存在は確かにスピードスケートの強化に必須かもしれないが，それによって私たちが失ってしまうかもしれないスポーツ文化にも目配せを忘れないで欲しい。

今回の高木の露出は，日本のスポーツ文化を変えていくきっかけとなるはずだ。私たちは，どんなスポーツ文化が良いスポーツ文化なのか，もっと議論すべきだ。そして北海道は，高木美帆や福島千里を育てた誇るべき文化がどのようなものであるかを全国に向けてもっと発信すべきだ。そのことが，北海道にとどまらない，日本のスポーツ文化をより豊沃なものへと進化させる契機になると信じている。

注

１）2009年12月31日，日本経済新聞　朝刊，25面。

２）3000メートル，1000メートルで五輪出場のための標準記録を上回っての３位，1500メートルでは優勝した。1000メートルのラスト400メートルのタイムは，ただ１人29秒台で１位吉井，２位小平より速く，先輩スケーターからもコーナリングの技術も認められていた。（日経新聞集－バンクーバー夢の舞台へ，開幕まであと１ヵ月，スピードスケート高木美帆。）また，当時は高校進学前で札内中学校所属。2010年1月12日，日本経済新聞　朝刊，28面。

３）2010年2月2日，11:40，プレスリリースデータベース。

４）ちなみに1位：浅田真央（フィギュアスケート，62.5%），2位：上村愛子（フリースタイルスキー，39.0%），3位：高橋大輔（フィギュアスケート，28.4%），5位：安藤美姫（フィギュアスケート，25.4%）。

５）特集－バンクーバー夢の舞台へ，開幕まであと１ヵ月，スピードスケート高木美帆。2010年1月12日，日本経済新聞　朝刊，28面。

６）同前。

７）全十勝ミニスプリント大会，小学１年生の部１位。2002年2月4日，北海道新聞夕刊地方，２面。全十勝スケート，小学１年生の部１位。2002年2月12日，北海道新聞夕刊地方，16面。第49回全十勝児童スケート大会，小学２年生の部１位。2003年2月3日，北海道新聞夕刊地方，2面。全十勝小中スピードスケート，2003年2月12日，北海道新聞朝刊地方，20面など。

８）第十八回狩勝サマーロードレース大会，小学１年生の部１位。2001年7月24日，北海道新聞夕刊地方，14面，第28回屈足まつり協賛町民マラソン大会，小学１年生の部１位，2001年9月17日，北海道新聞夕刊地方，２面，第十九回狩勝サマーロードレース大会，小学２年生の部１位，2002年7月22日，北海道新聞夕刊地方，２面など。

９）前掲2010年1月12日，日本経済新聞　朝刊，28面。

10）「知りたい！：スピードスケート五輪代表・高木美帆選手　スポーツ万能15歳」。毎日新聞　2010年1月9日　東京夕刊。

11）「冬物語・バンクーバー2010：スケート女子団体追い抜き　年女３人が団結」。毎日新聞　2010年3月1日　東京朝刊。

12）長い競技人生ゆっくりと（Vancouverドラマの先に）。2010年2月24，日本経済新聞　朝刊，39面。

13）五輪で健闘を＊幕別札内中　高木選手＊伸び盛り，オーバルで技術向上。2009年12月30日，北海道新聞朝刊地方，21面。